36　20世紀初期韓医学の診療録に見る傷寒診療例の考察

車　雄　碩
韓国 慶熙大学校韓医科大学医史学教室

『晴崗診療簿』は韓医師・金永勳（号は晴崗，1882～1974）が残した60余年間におよぶ診療の記録である．彼は1915年にソウル市の鐘路区で開院し，1974年まで診療活動を続けてきた．金永勳は個人的な来歴から『晴崗医鑑』の著者として最も知られ，韓国韓医学の近現代史で重要な位置を占める歴史的な人物である．彼は1904年に同済医学校の教授となり，同校で1905年から韓医学を授業したが，1907年に高宗が退位すると共に同済医学校は廃校とされた．そこで当時の韓医学の元老であった典医出身の洪哲普・張容駿・崔奎憲などとともに「八家一志会」を設立し，韓医学の復興運動に力を傾注したのである．1915年には「全国医生大会」を開催し，全国規模の漢方医団体を結成した．また1924年には学術的な団体の「東西医学研究会」を組織し，学術振興にも力を注いでいる．さらに1937年には，「京畿道立医生講習所」を開いて韓医学の後進を養成するなど，日帝時代の韓医学復興運動の先頭に立っている．金永勳はこのように医生大会の開催，全鮮医会での活動，学術誌の刊行などの対外的な活動と並行させつつも，自己の普春医院での診療活動も続けてきた．その時に作成したのが晴崗診療記録で，大きく「処方箋」と「診療簿」に分けられる．全部で1,000余冊に達する診療記録は，金永勳の長男・金琦洙氏がわれわれの慶熙大学校韓医科大学に寄贈し，現在も研究が進んでいる．

本研究の主要な目的は，韓国韓医学を代表する臨床記録の中で，この『晴崗診療簿』に記載される傷寒処方の用例を分析して，韓国韓医学で傷寒処方がどの程度活用されているかを検討することである．傷寒処方とは3世紀頃，中国の張仲景が完成した『傷寒雑病論』に見られる処方で，その運用は現在まで続いている．しかし韓国近代診療記録の代表的な事例である『晴崗診療簿』では，傷寒という病名の使用例と傷寒処方の使用例がともに1%未満で，極めて限定されている．具体的には，1915年8月から1924年12月までの診療記録は全部で21,375件ある．しかし，その中で傷寒の病名や病因に傷寒を含んでいるのは145件であり，わずか0.68%に過ぎない．またその中で傷寒の病名で傷寒の処方を使った事例は14件である．さらに加味小柴胡湯・加味理中湯のように，処方が加減された例を除くなら，純粋な傷寒処方を使用した事例は，腹痛に理中湯を処方（1916年2月14日），太陰の寒病に理中湯を処方（1916年12月7日），傷寒の陽明病に白虎湯を処方（1918年6月7日），傷寒の陽明病に大柴胡湯（1918年6月24日）を処方したという6件だけだった．

最近ある研究者は，韓国韓医学の伝統において『傷寒論』の内容を臨床応用する程度が日本の古方派に比べて少なかった理由として，中国医学を体系的に韓国化している『東医宝鑑』の中で，『傷寒論』の意味自体が本来の中国の姿から変化したからだと主張している．そうした主張に妥当性があるかどうかはさておき，このようなことが論議されていることは，『傷寒論』の伝統が韓国韓医学で弱かったことを傍証すると言えよう．